



「ア、ドロシー!？」

「ふおお……ふおお……」

ドロシーは胸と股間が露出したボンデージスーツを着ていた。首から下を足の先までダークグリーンのの艶めかしいエナメルが覆っている。手のひらサイズの小振りな乳房がラバーに圧迫されて外側に張り出している。目隠しと耳栓が一体化した頭部拘束具フェイスカバーを被り、大粒のボールギャグを噛まされていた。頭と背中に細いチューブが差し込まれ、椅子の後ろの小型のタンクタワーに繋がっている。

そして、少女の腹部はエナメルの黒緑色の艶に包まれて、妊娠でもしているかのようにポッコリ膨らんでいた。肛門にはマシンの太い管が挿入されていた。

「な、何だ、この腹は……?」

背後で自動ドアが閉まった。ロックが掛かる。室内のボイススピーカーから人を嘲弄するようなウルフの笑い声が聞こえてきた。

『あらあら……ちよっと一時間ばかり流腸して放置したら、すっかりカエル腹になったわね。なんて醜いのかしら。ようこそ、レジーナ伍長。待っていたわ』

「これは何のつもりだ、ウルフ! ドロシーに何をした!」

『研究班が新型オルガマシンのプロトタイプが完成したって言うから、その性能実験をしようと思ってね。ドロシーはその記念すべき第一号に選ばれた被検体……いえ、生贄かしら? ドロシーのような犠牲を何人か出してマシンはチェーンナップされているの。バイヴが強力すぎてオマ○コが破裂したり、アナルの括約筋がぶち切れて一生糞洩らしっ放しの体になったり。キャハハ!』

「な、何てコトを……」

『あーでも、その娘は見た目より頑丈に出来てるから大丈夫だと思っただろうよ? この間、新型の強力媚薬と、巨大電ノコバイヴの人体実験をやったらしいけど、こうして今も生きていますでしょう?』

「この人殺しめ!」

『今回も運よく生き残るかも知れないわ。それも貴女の頑張り次第でね、レジーナ』

「私の……?」

レジーナが眉をひそめた時、重いものが動く機械的な音がした。大型の冷蔵庫のようなヴーンという音だ。ウルフがオルガマシンを起動させたのである。

マシンは縦長の箱型機械である。その背部に九本の銀色のパイプに似たものが連結しているが、その内の二本がまるで命を得たミミズのように鎌首をもたげて動き出した。機械の触手。機械の蛇であった。

それは一見すると、マシンに付属したパイプにしか見えないが、実は人工AIを搭載した自律思考型のバイヴなのであった。

オルガマシーンが起動すると、このバイヴが九本の生ける機械蛇となって犠牲者の穴と

いう穴を犯す。生体センサーを使って女体の性感ポイントを精密サーチし、冷たい蛇腹で機械的に容赦なく責め立てる。バイヴは丸みを帯びた金属の輪を数百個も並べたような形をしている。この輪と輪の間の薄い膜状の物質は伸縮性に優れた化学繊維であり、バイヴが女穴から抜ける時にぐぐっと伸びて膣内を責め立てる。この輪の表面には粒状の小さな突起が数万粒もあり、生体学的に算出された人体への効果的な性的刺激を異なるリズムで常に与え続ける。

そんな機械の蛇が、無情にも椅子の上で両膝を立てて固定されているドロシーの体に迫った。ウルフが残酷にも施した浣腸責めで少女はボテ腹化し、陰唇が醜く発達した秘孔は又ル又ルに濡れていた。

機械触手の長さは最大10メートル、円周20センチ、亀頭部はなく全体が丸く、自発的に分泌する媚薬ローション体液でヌメっていた。

銀色に冷たく光る機械触手がドロシーの濡れた蜜穴を嗅ぎ当てた。丸い頭部をクリトリスに当てて、くりくりと性的刺激をドロシーに与える。

「んうーっ！ うっ、ううー！」

びくん、と拷問椅子に拘束されたドロシーの体が跳ねる。愛液の量は十分だと判断した機械触手が眼のないミミズの頭部を蜜穴に滑り込ませた。軽い抵抗の後、ドロシーの膣はたやすく触手の頭部を受け入れた。

「うぶっ！ ぐっ！」

ぬるる……長大な濡れた蛇体がドロシーの膣内の深い場所まで侵食していく。大量の浣腸液が腸内でちゃぽちゃぽと音を立てて波打った。膨張した腹部はエナメルボンデージの色を妖しく艶めかしている。

ずちゅずちゅ！ 冷たい金属の蛇体が膣内でピストンを開始した。赤く充血した肉厚な膣壁を粒輪が擦る。バイヴがピストンを引く時に、ゴム質の粘膜がぐうっと伸縮し、バイヴの蛇腹がアコーディオンのように伸びて粒輪が敏感な膣壁をしつこく擦り上げる。

未知の快楽にドロシーが顎を上げ仰け反り、苦しい呻き声を洩らした。

「ぐぶっ！ うっ、うぶっ！ ううーっ！」

彼女の腹には3000ccの浣腸液が入っている。機械触手が膣を圧迫すると腹部が必然的に押し上げられる。ただでさえ浣腸液が排便を求めて猛威を振るう中、この苦楽の地獄ピストンは拷問に近いほどの苦しみだった。

レジーナはそこにウルフがいるかのように、天井の隅に設置されたボイスピーカーに向かって叫んだ。

「き、機械を止める！ ドロシーが死んでしまっ！」

『新型のオルガマシーンは最大9本のバイヴが女体の穴という穴を埋め尽くし、皮膚を触手で覆って外と内から同時に最高度の性的刺激を与える。お浣腸は私からのオマケ。マシンの排水ポンプの出口をその娘の肛門に繋げている。ゆっくりだけど確実に膣内には汚

水が溜まっていくわ。タンクタワーがオルガで満タンになるまで浣腸は止まらない。浣腸の苦しみと機械触手の快樂地獄、そしてオルガ封印の同時責め——どう？ 究極の女体拷問でなくって？ ついでに尿道と乳首にも弛緩剤を打って細身のバイヴをぶち込んでみましょうか？ くくく……』

レジーナはその説明だけで体が震えた。腺病質なドロシーに何という苛酷な拷問をするのか。

そうこうする内に、もう一本の機械触手がドロシーの蜜穴にずっぷりと沈み込んだ。少女の肉穴が横に8の字の形に広がる。そして二本の触手が同時に息を合わせてピストンを開始した。ドロシーは腹中の燃えるような苦しみで顔を真っ青にして地獄のような声を出して身悶えた。

「ああ、ドロシー！ ドロシー！ ……教えてくれ、ウルフ！ 彼女のために私は何をすればいいんだ！ お前の残酷な趣味に付き合ってやるから早く教えてくれ！」

『うふふ、相変わらず理解が早くて助かるわ。まだ機械触手は二本しか起動していないけれど、もし全部の触手がドロシーの体に襲い掛かったらどうなるかしら？ そうよ、ドロシーはおそらく本当に死ぬか、発狂する。だけど、私の見たトコロではその娘は二本の触手までなら耐えられそうよ？ 残りの七本の機械触手はレジーナ——貴女が体を張って止めなさい』

「わ、私が……？ こんな気味の悪い機械と……？」

『仲間のためなら出来るわよね？ 言っておくけど、そいつの与える快樂は凄いわよ。最先端の人体力学と科学技術を合わせた世界最高のバイヴ技術。一本でも女を狂わすのに十分な威力を秘めているわ。そんな機械触手が9本！ うふふ、ドロシーがタンクタワーをいっぱいにするまで貴女の体がつかしら？ レジーナ……』

鬼畜め！ レジーナは激しい憎悪と怒りに身を震わせたが、ウルフの機嫌を損ねれば本当にドロシーが殺されかねない。それに、あんな妊婦のように腹を膨らませたドロシーが機械触手に嘲弄されるのを黙って見ていられるわけがない。彼女は仲間とともに苦しむ事に決めた。

「分かった。私が残りの触手を引き受ける。マシンをそう再設定してくれるんだな？」

『設定？ 違うわ、貴女がいやらしく尻を振って自分から触手を誘惑するのよ。ドロシーが死ぬのと、牝犬になるの、どっちを選択するかは貴女次第よ、エリート軍人さん』

「なっ……！」

ウルフの残酷さは天井知らずであった。極限まで女を辱めて地獄に墮とす事しか考えていない。彼女にとって人の生命や尊厳など路傍の石ころほどの価値しかないのだから。

『これから10分毎に、私はコントロールルームから機械触手を二本ずつ起動させるわ。ルールは簡単よ。貴女が身を挺して機械触手からドロシーを守り、彼女の生命を最後まで護りきれば貴女の勝ち。マシンは止めてあげるわ。タンクタワーがオルガでいっぱいにな

ればドロシーは浣腸責めから解放される。シンプルで分かりやすいでしょ？ さあ、ゲームの始まりよ！』

さらに二本の機械触手が蠢きだした。オルガマシンの本体から分離し、邪悪な蛇のごとくシウルシウルと生贄の祭壇の上のドロシーの肉体に絡みつく。

レジーナは慌てて触手の又めつく金属の胴体を両手で掴まえた。表面はローションでヌルヌルしていて不気味なほど冷たかった。

「ま、待て！ ドロシーには……私の友には手を出すな！ 私が身代わりになる！ 彼女をこれ以上苦しめるな！」

シウル……機械の蛇が彼女のほうを向いた。視覚器官はないが、それは確かにレジーナの美褐色の肉体を値踏みするように見た気がした。機械触手は向きを変えてレジーナの体に巻きつくくと粒状の突起で全身をなぞった。

「うひいッ——?!」

その瞬間、レジーナを凄まじい快楽が襲った。皮膚や肉や骨を超えて、神経を直接撫でられたような感覚。又める媚薬ローションが肌に染み込む。熱い。機械触手は新たな活きの良い獲物の性感帯をサーチした。

機械触手の体内センサーはレジーナの性的急所を赤いポイントで表示した。性感度の高さが赤色の濃さに反映する。ウルフに開発された女軍人の肉体は日に日にいやらしさを増している。レジーナの性感帯は、秘穴、クリトリス、尻穴……おもに下半身に集中していた。特に膣の性感度が通常の女体の二倍はある。

触手はその銀色の体をレジーナの両足の間に滑り込ませた。敏感さを増す秘裂の上をローションで濡れた機械の蛇がぬるるっと前から後ろへ通過していく。

「あっ、いきなりそんなトコロをお……！」

がくがく。レジーナの腰が抜けた。想像以上の快楽が秘裂を通じて全身に拡散する。触手の表面のツブツブが誘発する性的快楽は火花のように強烈だった。レジーナは腰を抜き、触手に強く股間を押し付けてしまった。

「ひゅっ！」

股間が灼けたような感覚に驚いてレジーナは腰を浮かせた。まだ挿入されてもいない。機械触手が陰唇をなぞっただけである。このツブツブ表面のバイヴ触手が膣に挿入されたら……と思うと、レジーナの顔は恐怖で青ざめた。

プシューっと空気が抜けるような音がして、ドロシーのボールギャグが外れた。口枷は外部から遠隔操作で着脱できる仕組みだったらしい。

「……んぷっ、ふああ！ ああ、苦しいよオ！ 浣腸液がお腹の中でちゃぶちゃぶって波打って、お腹が今にも破裂しそう！ ううー、機械を止めて！」

「ドロシー——！」

レジーナの呼び掛けは、目隠しと耳栓が一体化したラバーマスクのドロシーには聞こえ

ない。顔色を蒼白にして浣腸と触手拷問に耐えているドロシーの唇に、余っていた四本目の触手が滑り込んだ。

「んぷう！ んおお、なあにコレえ！ ジュプジュプ！ おほ、ほれえ……お口がオマンコみたいに気持ちいい。ツブツブが凄いのお！」

レジーナはその身に絡みつく濡れた機械触手を引きずって四つん這いで這い、ドロシーの口から触手を引き抜いた。触手は巢穴に戻りたがる海洋生物のごとくレジーナの手の中でジタバタと頭を振って足掻いた。

「ドロシーを苦しめるな！ く、口を犯すなら……私にしろ！」

レジーナはその言葉を決して軽率に吐いたのではない。股間の表面を滑るだけでこの威力である。皮膚よりも感度の鋭い体内——例えば口内に侵入してきたら、一体どれほどの快楽がスパークするか想像もつかない。「お口がオマンコみたい」というドロシーの言葉は端的にその感覚を伝えていた。

しかし、機械触手が唇を割って口内に侵入した時、レジーナは口中粘膜を通じてドラムの如く全身に轟いた快楽共鳴の強さに一瞬白目を剥いた。

「ぶおほッ！」

唾液が潮のごとく唇から噴き出た。レジーナは口内挿入でいった。頭部を口中に埋めた機械触手が唾液とローションで濡れる。その身を伸縮して伸ばし、ツブツブの金属輪でレジーナの口内を摩擦しつつピストンを仕掛ける。

女が絶頂していようが、困惑と恐怖で錯乱していようが、そんな感情はおかまいなしの非人間的なピストン責めである。

「うっ、うぶっ！ んむう、おお！ ジュプジュプ！ じゅるる！ お、おお……も、もうらめえ……！」

恐るべきフェラチオピストンの連打がレジーナの意識を絶頂のスパークで白く染める。イキながらの口内責め。唾液の泡が触手に掻き混ぜられて熱くなる。彼女の口は触手のローションとツブツブで第三の性器と化し、触手が舌の上を滑るたびに絶頂に近い性的衝撃が体内で弾けた。

『どう？ 予想以上に強力な快楽でしょう？ お口に挿入されてピストンされるだけでいってしまうのよ。まだオマ〇コに挿入してもいけないのに、今からそんな青息吐息で耐えられるのかしら？ そら、お口で感じてる真っ最中のところ悪いけど、下半身にも触手が忍び寄っているわよ』

口内快楽に悶えるレジーナの股間を触手が滑った。両足の間に挟んだロープを強い力で引っばられたような感じだ。無意識のうちに太腿で締めつけていた機械触手はそんな抵抗は無意味だとばかりにツブツブ表面で陰唇を責めた。ずるる！ 勢いよく触手が股間を滑りぬけていく感触にレジーナは気が遠くなった。

「あっ——あああッ!!」

一瞬遅れて性的解放……つまり絶頂の波が押し寄せた。口を犯されながら、レジーナは下半身でもいった。愛液の蜜が膣内でドツと湧き上がった。

その愛液で濡れた女の秘孔に、機械触手がずっぷりと身を滑り込ませた。絶頂したばかりの敏感なレジーナの膣内を太い金属の幹が埋めていく。

「うっ……うわああアアッ!!」

絶叫。挿入された瞬間、またレジーナはいった。機械触手の悪魔的なピストンが絶頂真っ最中の灼熱の膣内を駆け抜ける。一瞬の猶予も手加減もないアクメの連続。機械の粒筒が前後に滑る。それが女に発狂せんばかりの殺人的な快楽を叩きつける行為だとしても機械はプログラムに逆らう事はない。

——これがオルガマシンの力だ。その名の通り、女のアクメを搾取するために開発された悪魔の拷問マシン。本来ならこの上さらに電極パッドを全身に貼るのだが、まだ性奴隷として日が浅いレジーナやドロシーでは確実に死ぬのでそれは免除されている。それでもマシンのパワーは圧倒的であった。

「うぎやああ!! ぎやああ、うひいい!!」

白目を剥いたレジーナは口内と膣内を同時にピストン責めされながら汁を嘔いて悶え狂った。ドロシーのためならオルガマシンにも耐えられる——その目論見は甘かった。女に生まれた事を恨みたくなるような抗いようもない絶対的な肉の悦楽。レジーナの理性は白く染まり、人類の特権である高度な思考能力を奪われていく。脳に端子を繋げてインターフェースで性感を無理やり引き出されているかのような倒錯した感覚。体が自分の支配下を離れてしまったかのような……。

ぐちゅぐちゅ！ 機械触手が口と膣とで同時にピストン攻撃を仕掛ける。科学的に追求された女の性的快楽を引き出す触手がこれ以上ない精確さで性感ポイントをダイナミックかつ緻密に責め立てる。口内には愛液よりも濃い唾液が溢れ、一瞬も途切れることなく唇の隙間から滴り落ちている。

レジーナの意志とは関係なく、膣はテンポよく出し入れされる機械触手と動きを合わせて収縮し、ツブツブ輪が与える肉の快楽を最大限吸収しようとする。

レジーナとドロシーの嬌声が重なり、甘い牝声のアンサンブルが実験室に木霊する。

「ああああああ!! 凄いいい!! 触手がピストンすると全身がビリビリ痺れる!! ああっ、はああ!! 冷たい触手が深いトコロまで私を掘り下げてる!!」

「んああ!! お腹が破れるウ!! お流腸止めて!! オルガ、オルガしたいよう!! はああ、だ、誰……? 他にも誰かいるの? ああ、誰でもいいから助けて。お腹が苦しくてアソコが切なくて、このままじゃ本当に死んでしまいます……!!」

ドロシーは視覚と聴覚以外の何かで他人の存在を嗅ぎ取ったが、すぐに苦痛と快楽の波に埋め尽くされた。彼女の小さな肉穴にはダブルで機械触手が入り込み、柔らかな肉壁が削ぎ落とされんばかりに掻き回されている。膨れ上がった腹部が触手の一突きごとに水を

詰めた風船のようにタプタプ揺れるのだった。

二匹の性奴隷はたちまち牝と化し、全身を汗まみれ汁まみれにして喘ぎ狂った。強制的にアクメを引き出される感覚に慣れていないレジーナは白目を剥いて痙攣し、早くも息も絶え絶えになっていた。

——だが、ドロシーの生命を賭けた、女軍人VS新型オルガマシーン・ヤマタノオロチのバトルゲームは始まったばかりなのだ。